

トマス・テイラーよによるプロティノス受容研究 ——テイラー（初期）の業績に基づいて——

三宅 浩史

序

トマス・テイラー（Thomas Taylor, 一七五八—一八三五）は十八、十九世紀の英國において、独自の仕方で新プラトン主義の思想を受容し、その復興を目指し、自身の膨大ともいえる業績⁽¹⁾を有する種特異なかたちで残した人物である。時代は産業革命を迎えて、大きなうねりの中にあつた。それにもかかわらず、キリスト教の影響下にあつたと言いうる当時の英國社会において、彼は「現代のプレトン」、「異教の使徒」というように呼ばれたといふ。⁽²⁾また「特異なかたちで」業績を残したとも上で述べたが、テイラーはいわゆる新プラトン主義の体系こそが、眞の哲学体系を形成しているという、ある種の確信を持っていたように見受けられる。それゆえ、彼はその体系に連なる学者のギリシア語での諸業績を英訳し、詳細な注を施すことを主な目的にしている。そうした学者にはプラトン、アリストテレスという両巨人も含まれている。つまりテイラーは自らの思想を語ることよりも、ギリシア語でのテクストに詳細な注を施して、新プラトン主義の体系の全体を英語で示そうと尽力したのだと受け取ることができよう。

小論ではテイラーの諸業績の中でより若い時期に、プロティノスによるテクスト、すなわち『エネアデス』をどのようにテイラーは受容し、当時の英國に示そうとしたのかを考察したい。そこに

を世に出したあと、最晩年（一八三四）に『エネアデス』における文章の一部を英訳している。以上からも推察されるように、テイラーはプロティノスのテクストを、テイラー自身の生涯に渡るテーマとしている。そのうえでテイラーは、古代哲学の最後期に活躍したプラトン主義者たち、特にプロクロスに注目していることが、テイラーの伝記等からもうかがえる。⁽³⁾

はまたわれわれにとつても、新プラトン主義をどのように学べば、体系全体のよりよい理解につながるかに直結するものがあると言えよう。そこで上記に該当する『エネアデス』における八篇の論文 [Enn. I, 6 (1), V, 5 (32), V, 8 (31), I, 4 (46), I, 8 (51), III, 2 (47), III, 8 (30), IV, 8 (6)] を取り上げる。そしてそれらの名「エネアス」に関して英訳するに当たつて、テイラーが書いた序文や注等を通して、われわれが学びうる新プラトン主義の中核と思われるところに、可能な限り近づきたいと思う。

第一節 『美について』(一七八七)に関する [Enn. I, 6]

この本は、テイラーがプロティノスのテクストを出版した初めてのものである。そこには序文と脚注が添えられている。まずこの本のテイラーによる序文を追つていくことにする。⁽⁵⁾ そうすれば、テイラーがどのようにプロティノスを受容しているかの端緒がうかがえると思われるからである。

テイラーはその序文の冒頭で、プロティノスのテクストの難解さは、特に当時の英国人にとって、なじみの薄いギリシア語という言語に起因している旨を告げている。したがつて古代ギリシア哲学における知恵を学ぶことができなくなる。そこでテイラーはテクストを英訳することに着手する。ここでテイラーは翻訳に当たる語に「置き換え [transposition] (1)」という語を用い、他の箇所で「言い換え [paraphrase] (7)」という語を用いている。両者ともいわゆる翻訳 [translation] のだが、こうした自身の作業のどちら方も、以下の引用からうかがえるだろう。「……真理はすべて永遠で、その本性は置き換えによつて変わりえない、

とはいへ、こうすることによつて、真理は衣を変え、より優雅でも精巧でもなくなるだらうが (1)」。この引用から少なくとも、テイラーは読者に新プラトン主義思想のテクストが放つ言説に触れることを求めていると受け取ることができるだろう。だがテイラー自身のプロティノス受容のようすをたどるによつて、テイラー自身の作業の意味も、さらに明らかになるように小論を進めたい。

次に序文からうかがえるのは、いわゆる俗流の原子論に基づいた世界観へのテイラーの反論である。当時は自然科学の時代といわれる一九世紀を前にして、ある種の転倒した原子論が流布されていたと見ることができよう。自然科学的にとらえられた原子の像は、形を持つている。それゆえ、そうした原子は部分から成ることになる。そうだとすれば、そうした原子が分解しないようには接合させるものが必要になる。このように転倒した原子論にある意味で歩調を合わせながら、テイラーは主張する。「この接合の直接の原因は、何か非物質的なものでなければならない (2)」と。顕微鏡でも無限小にはたどり着けず、望遠鏡でも無限大には至れない。そうしたきりがないものへの探求は無益であることを読者に促し、テイラーは「精神の領域に進もう (2)」と読者を先導する。そこでは「あらゆるもののが知性の尺度に結びついている (2)」からである。

それではテイラーはプロティノスの著作、すなわち『エネアデス』をどのようにとらえているのだろうか。テイラーは『エネアデス』において、崇高な知恵が深遠に述べられていると示し、「底深く神聖な知恵に浸透しようとするとする人すべてにとつて、特に価値

がある(3)」と語っている。それではそうした知恵に浸透するには、読者はどのようにすればよいのだろうか。「第一の尊厳と重要さを持つ真理の発見には、内面に退くことが絶対に不可欠(3)」であることを、ティラーは主張している。⁽⁶⁾

それから *Enn. I, 6* におけるテーマである美自体についてティラーは説いている。この美は真の哲学の崇高な目的であり、善でもある⁽⁷⁾。しかしこうした言説は、同時代の大半の人々には受け入れられがたいことをティラーは承知している⁽⁸⁾。なぜなら当時の英國は自然科学的・思想が浸透し、産業化社会が発展する時代を迎えていたからだ、と一般に受け止めよう。そうした時代では、新プラトン主義的な精神世界についての言説を人々は受け入れがたいと考えられる。ではこうした言説はどのように人々によって理解されるのだろうか。それは「肉体との結合によって、自身の魂が激しく堕落していることを自覚している人だけに相応しい(4)」とティラーは語る。知性という媒介者を亡失してしまい、いわゆる「一者」への段階的な上昇ができなくなつた旨を、ティラーはわれわれの知性的な眼が「忘却の杯から痛飲した(4)」のだと記す。それによつて、ティラーは人間の魂の現状を示している。それゆえ自身の魂の堕落を自覚した人は、どうすればよいのか。ティラーは次のように進言する。「美自体の喜びに満ちた光景にいたるわれわれの非凡な先達として、プロティノスの後を追おう(5)」と。以上の文脈から、ティラーは自身を仲介者としてプロティノスのテクストを読む読者が、まさにプロティノスの英訳テクストを通して、プロティノスの追体験を促しているようすが受け取れる。それは読者が、自身の魂の自覺的な溯及を行うということ

にもなろう。そのように読者をプロティノスの論脈に導くことが、ティラーの主要な目的だとうがえよう。それではティラーはプロティノスのテクストをどのように受容しているのだろうか。ティラーによる英訳において、その端緒となる点を示してみる⁽⁹⁾。

序文におけるティラーの記述にも見られたように、I, 6 の第六節において善、すなわち一者は美であると記されている。その一方で、悪は醜である旨がプロティノスのテクストに示されている⁽¹⁰⁾。そしてそれが第二節では素材であるとも示されている⁽¹¹⁾。しかしティラーは素材が悪であるとは英訳していない⁽¹²⁾。ここにはティラーの素材への見方が示唆されている。実際にティラーは「素材は第一の惡でも、惡自体でもない(59)」と言及している。しかしこの件は、ティラーにおけるプロティノス受容の要点にもつながるので、後で I, 8 を取り扱うときに改めて考察することにする。

第一節 『プラトン神学の復活』(一七八九)に関する

[*Enn. V, 5, V, 8*]

この本では『エネアデス』における二つの論文が取り扱われている。まず V, 5 「知性対象は知性の外にはないこと、および善について」の第七節中の文章に留意してみる⁽¹⁴⁾。この箇所でプロティノスは、善すなわち一者を太陽の光に譬えて論じている。しかしティラーによる注の記述は、われわれが感知しうる光に焦点が当てられている⁽¹⁵⁾。この記述内容は、プロクロスに準拠している旨をティラーは示している⁽¹⁶⁾。プロクロスは「太陽の光は場所であり、非物質的な物体である(37)」と見なしているとティラーは述べ

る。ここでプロクロスの言説がまず示していることは、一者が万有の原理であるように、太陽の光はいかなる物質的な本性よりも卓越しているということである。太陽の光は非物質的な物体である。しかし、それは万有の等級としての場所であるから、「諸物との距離(37)」を与えることになる。そこでプロクロスには、新プラトン主義に沿った自説への問い合わせが生じる。「場所、すなわち光は無生か、それとも（生を含む——三宅記）魂を分有しているのか」という問い合わせである。⁽¹⁷⁾

それに對してプロクロスは、非物質的な物体、すなわち場所（光）は諸物の源泉である「かの魂⁽¹⁸⁾」に動かされていると示し、場所（光）が神聖な生を持ち、「無活動だが、自動の本質を持つ(38)」と述べている。したがって、魂が二重の仕方で、ある点では本質にしたがつて、他の点では活動にしたがつて自動であるとすれば、場所（光）も不動の部分もあれば、動の部分もあるととらえうる。

それでは、場所において活動している動は何を意味しているのか。それは諸物体を動かすもののことである。まず場所には距離があり、そこでは、諸物体は各部分に分かれている。そこで、際限なく動いている魂の力を、場所がいわば借りるようになる。動を生み出すのは生であり、場所は生を分有しているので、配置する動はあらゆる部分を動かし、物体のあらゆる部分を場所の全体に行き渡らせようとする。しかし物体のあらゆる部分は、そのように場所の全体には配置されない。なぜなら感性界において、諸物には能力の欠如があるからである。それゆえプロクロスは「残りのものの源泉である魂の生のように非物質的で不变な生と、物質

的で可変な生の間には、不变で物質的な生が適切な仲介者として介入すべきである(38)」と主張する。それでは、生をめぐる魂と物質の仲介者とは何か。それは魂の作用を実際にこの感性界で行為として行う、人間の生のことに他ならないだろう。ここでは人間の行為の意味が探求されることを通して、人間の存在理由が示されている。ティラーは以上のように、プロクロスの推論を介して、光についてのある意味で深遠な言説をとらえていると言えよう。

次に、V,8「知性的な美について」の受容について考察する。

当節で取り上げた『プラトン神学の復活』には、特にティラーによる受容を示す記述は見当たらない。だが、ティラーは後年出版する『プロティノス著作選集』Select Works of Plotinus (一八一七)への序文で、この論文の一部を引用している。そこにはプロティノス受容の糸口がうかがわれる所以、その箇所を取り上げてみる。そこには知性界にあるものの最高の類が示されている。つまり、まず「だが、全ては全てにとつて、その内部に至るまで、また全ての点で明瞭である」と知性の本質的なありようを示し、「いたるところに全体がある⁽²²⁾」から、有・異・同が示される。また、「動もまた純粹である。何故なら、動とは異なる本性（存立）を持つ動者が、動が進行することを妨げることはないからである」から動が、「静も動搖させられることはない。なぜならそれは、静止にあらざるものと混合されていないからである⁽²⁴⁾」から静が示される。以上、有・異・同・動・静という知性界にあるものの最高の類が示される。そして、「美は美である。というのも、美は美ではないものの中にはないからである⁽²⁵⁾」と知性は万有であり、美でもあることが述べられているさまを、ティラーは示して

いる。以上から、知性界の実相を示すことでプロティノス受容において、少なからず重要な一端となるものが示されていると見えるよう。

また、V, 5 に関してティラーは、人間の存在理由に関する記述をしていた。V, 8 では人間固有の役割について示された箇所がある。それは同「エネアス」第七節の英訳において、斜字体で強調されている。「なぜなら人間は世界の全体から生じ、かつ世界の全体を作るのだからである⁽²⁶⁾」と。これはどのような意味を持つのか。同箇所の直前の文脈を見てみよう。それは次のようになる。人間の魂が知性界で形相でもあつたときは、何の労苦もなく感性界を支配したのだが、今や感性界に生じて、ある意味で形相を離れて世界を労苦とともに作つていくようになつた。その理由をプロティノスは「なぜなら人間は生じたそのときに、万有であることを止めたのだからである⁽²⁷⁾」と記している。ここには以下で考察する IV, 8 での魂の降下に関する問題と重なる事態が示されている。そこで、ティラーによる IV, 8 受容を考察するところで、考えてみたい。

第二節 『プロティノス五書』(一七九四)に関する

[Enn. I, 4, I, 8, III, 2, III, 8, IV, 8]

この本では『エネアデス』における五つの論文が取り扱われている。ここでは各「エネアス」に注等は打たれていないのだが、序文にティラーのプロティノス受容に関する記述が見られる。そこで、その箇所を中心していくことにする。またこの序文でティラーは、プロクロスからもしつかり学んだ旨を告げている。そ

れゆえ、ティラーの記述にプロクロスが少なからぬ影響を与えていると推察される。

I, 4 「幸福について」に関してティラーは、幸福とは「万有がそのままに適った完全さを獲得するとき⁽²⁸⁾」であると斜字体で示し、「人間の幸福は完全な知性の力に存する⁽²⁹⁾」と記している。それでは、知性と人間の魂との関係をどのようにとらえれば、魂は「完全な知性の力」のものにあるといえるのだろうか。序文の箇所でのティラーによるこの「エネアス」受容の要は、知性の魂をめぐる超越と内在という問題にあると受け取れよう。それではプロティノスは幸福をめぐつてその件についてどのように語っているのだろうか。それが端的に現れている箇所を同「エネアス」第四節から引用する。まず「このような生が神々のみにあるのだとすれば、幸福であることを人は彼等のうちに定めることができるとするであろう⁽³⁰⁾」と述べている。これは知性が魂を超越していることを示している。また「それゆえこのように生きている人にとって、生は自足したものである⁽³¹⁾」というのは、知性が魂に内在していることを示すことになる。以上の引用から、知性と魂との関係は、人間において分離した状態にあることになる。そこでティラーは、プロクロスが唱える異議を示す⁽³²⁾。その異議の要点をまとめるところ、次のようなになる。われわれの知性が知性界に留まっているなら、われわれの知性は永久に理解して転移する必要もない。転移しないならば、われわれの知性は知性であつて魂の部分ではない。もし転移するならば、われわれの知性は永久に存在し、ときおり知性であるものが一つの実在を形成することになる（そんなことはありえない）というものである。その異議を受けてティ

ラーは次のように示す。われわれの知性は現実態にはあるものの、その力を貶める諸物との結合という状態にある。われわれの知性はそれ自身から活動する本質的なものだが、感性界において感覺しうるものに傾く魂の性向により堕落している。⁽³⁵⁾しかしながらティラーは、われわれの知性の知性的なものは完全になりうると示す。したがって、われわれの知性における知性的なものが、完全なものという点ではある意味で可能態にあることになる。そこでそうした知性としてアリストテレスの能動的知性 (intellect in capacity) をティラーは提示する。⁽³⁶⁾それは魂における知性と魂を超越した知性をいわば繋ぐものである。それは一方で、魂から超越する実在としての知性に依存する。しかし他方で、魂に内在することによって実在としての知性から分離して、魂における知性の本性の完成を成し遂げるためのものもある。⁽³⁷⁾

I, 8 「惡とは何か、そしてどこから生ずるのかについて」では、素材イコール惡⁽³⁸⁾というのが、同「エネアス」におけるプロティノスの一貫した見方である。⁽³⁹⁾しかしティラーはこうした見方を知らない。この見方は第一節の最後の箇所で示唆しておいたので、ここで改めて考察したい。

該当箇所でまず問題になつてゐるのは、惡の存在である。しかしティラーは、惡は存在しない旨を提示する。惡が存在するかのようを見えるのは、全体と部分の関係を部分同士の関係と取り違えるからである。「神⁽⁴⁰⁾と諸物との関係は、われわれの諸物との関係とは異なる (57)」とティラーは主張する。諸部分相互の関係について、「ある種の惡があるが、全体へ向けては善である (57)」。ここからひとつの秩序の全体において、惡はありえない。そこで

ティラーは「完全な惡というようなものは存在しない (58)」と確信する。

諸部分として感性界に存するのは、自動の魂と被動の物体である。それらが変化しつつ存続することで、感性界で一定の役割を果たすことになる。魂は自動の本性を持つため、惡意をもち悪事をなすこともあるが、全体から見れば、それはまつたくの善などだとティラーは述べる。⁽⁴²⁾それはいつたいどのような次第のことをしていているのだろうか。「善きものらの中には、先立つものもあれば予備的なものもある (58)」と説明が始まる。前者は自身のためにあるが、後者は他者のためにある。後者は罰のことを示す。ではこの罰は何のためにあるのか。罰は善の本性からはなれた不正な行為に伴つており、「罰における神の意図は魂を浄化し、最高次の善を受け取るのに相応しく魂を配列することである (58-59)」と述べられる。それゆえティラーは「ある点で善ではない惡はない。なぜならばからいの慈悲深い照射は万物に及ぶからである (59)」と述べる。⁽⁴³⁾それでは人間がどうえる惡はどのようにして生じるのか。「惡はロゴス的なものと非ロゴス的なものとの間の均衡を欠いて生じるのに違いない (59)」とティラーは語る。また物体に関して、惡は形相の中にも素材の中にもない。なぜなら素材は形相の照射を希求しているからだと示す。それでは惡とわれわれがどちらのものは何か。それをティラーは影のような種の存在 (*parupotostáous*) であると述べる。そして影のような性がなければ、生成は存在しえなくなるので、「惡でさえも宇宙（感性界）⁽⁴⁴⁾の完成に不可欠である (59)」とティラーはある意味で、惡の存在理由についても言及している。

次に III, 2 「神のはからいについて」において、神のはからいとしてとらえられているものは、言い換えばある種のロゴスである。プロティノスが主として問題にしているのは、そうしたロゴスについてである。ティラーはそうしたロゴスへの疑念がプラトン以降の哲学者たちに抱かれ、そうしたロゴスよりも不平等な運命に人間は左右されているのではないかと受け取られていた旨を示す。⁴⁴ しかしそれは彼らがそうしたロゴスについて知らないからであり、それゆえ早期ペリパトス派、ストア派、そしてある種のゲノーシス派らの見解をティラーは批判する。⁴⁵ それでは、ここで知られるべきロゴスとは何であろうか。同「エネアス」から引用すると、次のようにある。「實にそのロゴス（原理）とは純粹な知性でも、知性自身でもなく、また純粹な魂の類でもなく、純粹な魂に依拠するものであり、知性と魂の両者から発するいわば輝きのようなものである。知性と知性に相應しくしたがつている魂がこのロゴス（原理）を生み出したのであるが、このロゴスは何らかの条理を安静に有する生命である」⁴⁶ 以上から、こうしたロゴスは知性と魂の協働作業の過程であることが理解できる。だが、こうしたロゴスを通して人間は知るのだと受け取ることもできよう。それでは人間はどのようにして知るのか。その作用の根源へと遡及することによって、新プラトン主義的な認識論の一端を示していくと思われるティラーの記述内容を追つてみよう。⁴⁷

続いて III, 8 「自然、観照、および一者について」に関して見てみよう。この「エネアス」においてプロティノスは、観照をテマにしている。自然、魂、知性の観照をたどり、ある種の自己否定を経て一者にいたる。そしてプロティノスは「では一者とは何か。あらゆるものを作り出すことができる力である」と記している。⁴⁸ しかしティラーは当該の序文において、自然の観照の記述にとどめている。⁴⁹ ティラーは、感性界に住むわれわれにもつともじみ深い作用である自然をモデルとして、その観照という事態が各段階にある者のロゴスを受け取る形でなされることを通して、新プラトン主義の体系が理解されていく方途への案内を

で、隣接しているそうしたものらを通して魂を動かす、ある種の生がある。それは欲求のあらゆる対象へと駆り立てるような力である。そして理性にもある種の生にも先立ち、魂の一者が存在する。それは「ある種の不可分な本性(63)」を持つものである。そうした本性を持つものがないと、「私は知覚する」、「私は推論する」、「私は熟慮する」ということの意味も、それら同士の違いもわからない。ここには、いわば人間の意識を統一する作用が必要となる。それゆえ、こうした本性を持つ魂の一者が存在するからこそ、自分の憶見や欲求や意志が何であるかも知ることになるのだ。以上のようにティラーは知るという事態を語っているつまり、「知る」ということをするためには、魂の一者が必須ということになる。そして魂の一者を通した知をとらえることにも、知性と魂の協働作業によるロゴスが関わっている、とわれわれはとらえることができよう。そこには神のはからいの自覺ということも、ある意味で重なつていても受け取れよう。

しているのだと受け取ることができよう。

最後に IV, 8 「魂の肉体への降下について」を考察してみたい。

この「エネアス」は「一体どうして私は今降下しているのか、一体どうして、私のこの魂はこの肉体の内部に生じたのか」⁽⁵⁰⁾というプロティノスの問い合わせから始まる。この問い合わせに対しテイラーはプロクロスの見解を援用しながら、以下のように答えようと記している。⁽⁵¹⁾ 知性は知性の作用とはからいの作用という点で、二重に完全である。魂は多産で不变の力である知性を、観照を通して模倣しようとするのだが、自身の自動を通して、知性の観照を離れ、感性界に降下することになる。それゆえ人間の魂において、知性もはからいも部分的なものになる。⁽⁵²⁾ この事態は、先に第二節において、⁽⁵³⁾ 受容を考察する箇所で保留しておいたことと重なる。すなわち「なぜなら人間は生じたそのときに、万有であることを止めた」のである。それにもかかわらず、「魂の降下は宇宙の完成に寄与する (70)」と示される。そのために必要となる存在は何か。テイラーは、永久に不死のものだけとか、死すべきものだけが存在すべきなのではない。その中間者となり、決して不死ではなく、ロゴスと知性を分有するものらが存在すべきなのだ、と記している。これは人間の存在理由についての記述であり、第二節での、⁽⁵⁴⁾ 受容において示されたこととも通じると言えよう。またそれによつて、⁽⁵⁵⁾ 受容の箇所での、「人間は世界全体から作られ、かつ世界の全体を作る」に繋がる事態だと受け取れよう。つまり部分的な魂の降下は、あらゆる生き物を完全に構成することになる。⁽⁵⁶⁾

結語

以上から、初期テイラーによるプロティノス受容に関するまとめると、次のようになる。まず第一節で I, 6 受容に関する取り上げた悪の問題は、第三節における I, 8 の受容に関する記述で解決され、悪のある意味での意義が示された。また、第二節において、⁽⁵⁷⁾ ⁽⁵⁸⁾ および第三節において IV, 8 の受容を考察することにより、人間の存在理由についての言説がうかがえた。そして III, 2 受容では神のはからいを通してとらえられたロゴスを起点に、人間が知るという事態の要点が読み取れた。I, 4 受容では魂をめぐる知性の超越と内在と言う事態をとらえ、III, 8 受容では自然の営みを観照のモデルとしてとらえているようすがうかがえた。

以上、『エネアデス』における八篇の「エネアス」からテイラーが受容する要となつてゐるのは、人間の魂であるととらえられる。それは悪と関わり、人間としての存在理由を持ち、ロゴスにしたがう者だからである。また、これら八篇の「エネアス」受容を通じて、人間が絶えずロゴスをとらえるべきものとして記されていることがうかがわれた。今回の考察においてある意味で気づいたのは、テイラーが受けたプロクロスからの影響である。テイラーのプロティノス受容についての考察を進めるうえでも、プロクロスをさらに学ぶ必要があると思われる。今後の課題としたい。

【註】

- (1) Kathleen Raine, George Mills Harper(ed.), *Thomas Taylor the Platonist*, Princeton: Princeton University, 1969. pp. 523-533.
- (2) *ibid.* p. 105.
- (3) *ibid.* p. 125 参照。
- (4) 田中哲也 Paul Henry. Hans-Rudolf Schwyzer (ed.). *PLOTINI Opera*. Tomi I &II, Clarendon: Oxford University Press, 1964 & 1977. 細部の英訳 Plotinus. Taylor, Thomas (tr.), *Collected Writings of Plotinus* in Thomas Taylor Series Book III, Frome : The Prometheus Trust, 1994. pp. 1-144. ハーバード大学蔵 Plotini Ficino (tr), *Plotini Enneades*, F. Creuzer & G. H. Moser (ed), Paris: Instituti Francici Typographis, 1896. を用いた。R. Harder, Hamburg: Felix Meiner Verlag, 1956-1971. 細部は É. Bréhier, Paris: Société d'édition Les Belles Lettres, 1954-1960. の翻訳に参考した。細訳は田中美知太郎、水野昭明、田中豊安彦訳『プロクルス全集』(中央公論社、一九六七)を使用した。
- (5) Plotinus. Taylor, *op. cit.*, pp. 1-5. プロクルスが「物」を用いたもの。名前用のカウント、あるいはページ数を示してある。
- (6) *ibid.* p. 9 における註文でも、トマス・テイラーの証を加えて、*ソウル*。
- (7) *ibid.* p. 7 における註文参照。
- (8) *ibid.* p. 5 および p. 19 参照。
- (9) 田中哲也『ヒューム』から引用箇所の冒頭に記す如「ヒューム」の翻訳参考文献。
- (10) 6, 23. ... , ὥστε κάκειν ταῦτον ἀγαθὸν τε καὶ καλόν, ...
- (11) 6, 21-22. ... , ἡ δ' ἐπέρα φύσις τὸ αἰσχρόν, τὸ δ' αὐτὸ καὶ πρῶτον κακόν, ...
- (12) 2, 16-18. αἰσχρὸν δὲ καὶ τὸ μὴ κρατηθὲν ὑπὸ μορφῆς καὶ λόγου οὐκ ἀνασχομένης τῆς ὕλης τὸ πάντη κατὰ τὸ εἶδος μορφοῦσθαι.
- (13) Plotinus. Taylor, *op. cit.*, p. 14. ... and turpitude is of an different nature, and participates more of non-entity than being.
- (14) 7, 12-14. εἰ δέ τις φῶς πᾶν εἴναι αὐτὸν λέγοι, τοῦτο διὸ τις λάβου πρὸς δίηλασιν τοῦ λεγομένου...
- (15) Plotinus. Taylor, *op. cit.*, pp. 37-39.
- (16) Plotinus. Taylor, *op. cit.*, p. 37. トマスの訳文では *The six books of Proclus on the Theology of Plato* などの註記は翻訳してある。(Raine & Harper, *op. cit.*, p. 113 & 125.) ルンドリトスが序文で述べる「ソウル」の内容は、アリストテレスの考察は、今後の課題である。
- (17) 非物質的であれ物体が他のものに物体に受け取られ、浸透していくのかどうかの問題において、ソウルが、ルンドリトスの省略である。
- (18) “that soul”(38)
- (19) *Enn.* V, 8 § 3, 18-4, 39 を英訳して田中訳による

- τὸ ὄντως κακοὺ μηδεμίαν ἔχον ἀγαθοῦ μοῖραν.

(20) 田中、前掲書7〇頁参照。

(21) 4, 5-6. ..., ἀλλὰ πᾶς παντὶ φαινεῖς εἰς τὸ εἴσω καὶ πάντα·

(22) 4, 7-8. ..., ὥστε πανταχοῦ πάντα ...

(23) 4, 11-13. ἐστι δὲ καὶ κύνης καθαρά· οὐ γάρ συγχεῖ αὐτὴν
ἰοῦσαν ὁ κυνῆ ἔπειρον αὐτῆς ὑπάρχου·

(24) 4, 13-14. καὶ ἡ στάσις οὐ παρακυνουμένη, ὅπει μὴ μέμικται τῷ
μὴ στασίῳ·

(25) 4, 14-15. καὶ τὸ καλὸν καλόν, ὅπει μὴ ἐν τῷ <μὴ> καλῷ.

(26) 7, 35. γενόμενος γάρ τοῦ ὄλου τὸ ὄλον ποιεῖ.

(27) 7, 28-32. 参照。

(28) 7, 32-33. ἀπέστη γάρ τοῦ εὗναι τὸ πᾶν νῦν ἀνθρωπος
γενόμενος·

(29) Plotinus, Taylor, *op. cit.*, pp. 55-71.

(30) *ibid.* p. 55

(31) 4, 3-4. ..., ἐν θεοῖς ἀντὶ τις τὸ ἐνδαιμονεῖν θεῖτο, εἰ ἐν ἐκείνοις
μόνοις ἡ τουαίτη ἔχει.

(32) 4, 23. αὐτάρκης οὖν ὁ βίος τῷ οὕτως ζῶντι ἔχοντι·

(33) ムゼウスの異議をアリストテレスが「ムゼウスの批評」今後の課題に残す。

(34) Plotinus, Taylor, *op. cit.*, p. 56.

(35) *ibid.* 57.

(36) *ibid.* 57. 水地崇『トニベントルバ「ト・ト」』注解(見
洋書版 11001) 1100版^o

(37) *ibid.* 57.

(38) 5, 8-9. ἀλλ' ὅταν παντελῶς ἔλειπῃ, ὅπερ ἐστὶν ἡ ὕη, τοῦτο

(39) I 6, 2, 16-18. 参照 1100版^o

(40) Plotinus, Taylor, *op. cit.*, p. 57.

(41) 参照 1100版^o

(42) Plotinus, Taylor, *op. cit.*, p. 58.

(43) *ibid.* p. 59.

(44) *ibid.* p. 60.

(45) *ibid.* pp. 60-61.

(46) 16, 13-17. ἐστι τούμνῳ οὐτος οὐκ ἀκρατος νοῦς οὐδ' αὐτονοῦς
οὐδέ γε ψυχῆς καθαρᾶς τὸ γένος, ηρτημένος δὲ ἐκείνης καὶ
οἷον ἔκλαμψις ἐξ ἀμφοῖν, νοῦς καὶ ψυχῆς καὶ ψυχῆς κατὰ νοῦν
διακειμένης γεννητάπων τὸν λόγον τοῦτον ζωὴν λόγον τιὰ
ησυχῆ ἔχουσαν.

(47) Plotinus, Taylor, *op. cit.*, p. 62.

(48) 10, 1. Τί δὴ ὅν; δύναμις τῶν πάντων ...

(49) Plotinus, Taylor, *op. cit.*, pp. 67-68.

(50) 1, 8-10. ...πῶς ποτε καὶ νῦν καταβαίνω, καὶ ὅπως ποτέ μοι
ἐνδον ἡ ψυχὴ γεγένηται τοῦ σώματος ...

(51) Plotinus, Taylor, *op. cit.*, pp. 70-71.

(52) *ibid.* p. 70.

(53) *ibid.* p. 70-71.

(54) *ibid.* p. 71.